

言語社会研究科 博士論文要旨

著 者 荒井 幸康

論 文 題 目 「言語」の統合と分離 —1920～1940年代のモンゴル・ブリヤート・
カルムイクの言語政策の相関関係を中心に—

学位取得年月日 2004年3月26日

本研究の目的

本論分の目的は1920年代から1940年代にかけてモンゴル（現在のモンゴル国）、カルムイク、ブリヤート（以上、現在のロシア連邦構成共和国であるカルムイク共和国、ブリヤート共和国をさす）にて行われた言語政策の相関関係を例として、「言語」の統合と分離を探るものである。

これら、現在では、別々の言語を話す別々の民族とみなされている三地域に住む人々が一堂に会して、言語の統一について話し合う機会があった。

それが1931年1月10日から17日まで行われたモスクワでのモンゴル諸族の言語・文字問題会議である。

彼らが一堂に会し、会議を開くのは、これが最初で最後である。その意味において、この会議はモンゴル史の研究にとって意義深い会議となった。会議の目的が、三地域のアルファベットや、正書法、語彙作成の完全なる統一であったとはいえないが、少なくとも原則の統一をめざそうとするための会議であったことは明らかであるからである。

1920年代から40年代にかけて、社会主義体制にあったソヴィエト連邦、モンゴル人民共和国、トウバ人民共和国などでは言語のラテン文字化政策が行われた。カフカスのテュルク系民族アゼルバイジャンで始め起こり、その後、ソヴィエト連邦に瞬く間に広まり、様々な民族言語のラテン文字表記が試みられた。

ソヴィエト連邦全域での言語政策としてのラテン文字化に関する研究は多く存在し、特にソヴィエト領内のテュルク系諸語のラテン文字化に関しては、それをひとまとまりとする研究も存在する。が、モンゴル諸語を全体として捕らえ、ラテン文字改革を含んだ言語政策史の詳細な研

究は未だ存在しない。

今回モンゴル、ブリヤート、カルムイクの三地域を一つのまとまりとして研究する根拠は、上記の会議の存在である。しかし、興味深いのは、この会議で統一する方向にあった三地域の言語表記は現在に至ると三つの別々の原則を持ってしまったことである。

会議における意見の一致はあるいは相異は、この会議に至るまでのどのような背景によるものなのだろうか、また、会議の後、これらのモンゴル諸語はどのような運命をたどり、それぞれが独立した言語を形成することになったのだろうか、本研究の目的はこのような問題設定からモンゴル国、そして現在のロシア連邦、旧ソ連に住むモンゴル系少数民族の住むブリヤートとカルムイクにおいて1920年代から40年代初めまでに試みられたラテン文字化、キリル文字化を中心とした言語政策の過程と三地域の相互関連性を探り、モンゴル諸族の言語の統合、あるいは分離に関する考察をするものである。

本研究の構成

本論文は序説と本論六章、そしてまとめから構成にされ、その内容は以下の通りである。

序論、モンゴル諸族文字・言語学会議

ここでは本研究の目的、先行研究、本研究の構成が述べられる。

本研究の目的は以上述べたとおりであるし、本研究の構成はここで述べられるのでこの章の要旨は省くこととする。

第一章、ソヴィエトにおける言語政策

ここでは本論を検討する上で、背景となるソヴィエト連邦全体の言語政策の推移に関して考察していきたいと考える。

大きくラテン文字化政策期とキリル文字化政策期に分けたが、ここでは主に文字と民族政策に関わる問題を検討し、「国際」的な語彙の問題では、語彙に関する政策に関して検討していく

ことにする。

独自のラテン文字化計画をもっていたブリヤートを初め、カルムイク、モンゴルにおいてラテン文字化政策が行われた背景には、ソヴィエト全国で展開されたラテン文字化運動があった。1920年代から1930年代までソヴィエト領内の様々な言語に起こったラテン文字化運動は、ソヴィエト領内の文字の無かった50以上の民族の言語やアラビア文字などを使っていた民族の言語を対象に展開された運動である。

ラテン文字化運動は1922年、アゼルバイジャンにおいて今まで使っていたアラビア文字に代え、ラテン文字を自らの民族語の文字として採用したことから始まる。この運動は、1926年2月26日から3月6日までアゼルバイジャンの首都バクーで行われた全連邦テュルク学会議で、チュルク系諸語の文字を統一しようとする運動に発展し、1929年8月7日、ソヴィエト中央執行委員会および人民委員ソヴィエトで「ソヴィエト連邦内のアラビア文字を使用する民族の新ラテン文字について」という決定で、アラビア文字を使う連邦内全ての機関にラテン文字化が通達されさらに拡大する。

新テュルク文字連邦中央委員会は1930年8月15日のソヴィエト連邦中央執行委員会民族会議幹部会によってモスクワに移されることが提案され、同年新アルファベット連邦中央委員会と改称される。そしてラテン文字化運動はテュルク系の言語だけでなく、カフカスの様々な言語やペルシャ語系の言語、フィン・ウゴル系の言語やシベリアの諸言語にも全ソヴィエト的に広まっていったのである。ソヴィエト領内のほぼ全ての民族の文字を作る運動へと発展していったのである。

また、この運動は国境を越え、1930年代に新疆のウイグル、カザフ、キルギス人たちにも及び、1944年までは独立を保ち、後にソヴィエト連邦に併合されるトゥバ共和国のトゥバ語においても1930年6月28日にラテン文字化が発表されていくことになる。

運動を概観するというならば、当初は近代化とイスラム教徒の断絶、あるいはテュルク系諸語の統一を思考していたが、次第に、一字一音の文字体系—新テュルクアルファベット—をベースに、様々な民族言語にこの文字をあてがい、あらゆる民族における文字とそれが表す音声の統一を目指す運動の面が前面に出たものとなった。その後に行われたキリル文字化はある音に対して民族言語ごとにバラバラに文字をあてていったことから考えると、文字と音声の関係をソヴィエト全体で統一しようとしたことはこの運動の重要な特徴といえる。

ラテン文字化案は一番遅くて1935年に発表されたものがある[Яковлев(1936), 33]。しかし、も

うそれ以前に変化の兆しが見えてくる。1933年夏にはタタールの州委員会第一書記であったラズモフがラテン文字を廃止、キリル文字化を提案した。この時、ラズモフは「激しい失跡」を受けたという。しかし、1934年、中央執行委員会文化扇動部がまとめたラテン文字化の方針では、a), 大部分が海外に住んでいる民族の言語はラテン文字化しない(例：朝鮮語、ペルシャ語)、b), バイリンガルであるか、非常に少数の話者しかいない言語はラテン文字化しない、c), 現在、キリル文字を使っている言語に関してはキリル文字化しないとはっきりと「統一」へ向かう方向性からの後退が見え始めたのである。

1935年にははっきりと方針の転換が見えてくる。1935年7月ソヴィエト連邦最高ソヴィエト中央執行委員会幹部会でラテン文字化が概して成功裏に完結したと述べられたが、同じ幹部会で一ヶ月前には、ある一部の北方民族やその他の民族にラテン文字を導入する新アルファベット委員会の行為は深刻な間違いだと非難されていた。さらに翌8月の同幹部会では新アルファベット全連邦中央執行委員会に対して、それまでの文字を作成する活動から正書法、術語、そして文字といった言語の発展に関する問題を扱うよう提案がなされるのである。

これを受けて地方でも、今までの活動を総括するような言語学会議が様々な地域で行われる。1936年3月チュバシで行われたチュバシ自治共和国の言語建設に関する報告がなされ、同年ウドムルト地方共産党でも言語建設に関する報告がなされたことはその一例として挙げられる。

こうして1936年からぼつぼつとキリル文字化を採用する言語も現れる。1936年4月、最初にキリル文字化を決めたのは北カフカス言語のカバルディノ語であった。1936年8月、第一回全ソヴィエト自治共和国教育人民委員会は、ソヴィエト連邦教育人民委員会が、「ロシア・アルファベットは封建的因襲的な異物を帯びている」という観点から活動をする偏向に対処していないと新アルファベット委員会を非難した。こうしてラテン文字化がイデオロギー的に否定される。1936年12月には、ソヴィエト連邦中央執行委員会民族会議部会がさらに北方諸言語に対してキリル文字の導入を決めるなど、キリル文字化が本格化してゆく。

その後、ラテン文字を導入していた民族言語に対してもキリル文字化への移行が、行われ、1940年代初めまでに、表記がなくなった言語以外は全て、キリル文字化していくことになる。

ここまでは文字の問題であったが、同様に、語彙の問題もソ連邦の言語政策において重要な問題であった。

特に、共産主義用語として頻繁に使われるようになった様々な「国際的な」語彙などの扱いに関してはロシア語以外の民族語においても、非常に注意が払われた。

「国際的な」に語彙の扱い使用に関して、エンゲルスが科学技術用語の翻訳は、内容を歪めるだけであり、説明ではなく混乱であると述べていることなどマルクスの創始者たちの引用をかりて、ソ連邦において次のような原則が引き出されたと田中克彦は言っている：

- 1) 国際的になった用語は翻訳してはならない。さもないと意味を歪めてしまう
- 2) しかし外来語彙の乱用は慎むべきだ。その言語に明晰に表現できる言葉があれば借用すべきでない

1933年2月に行われた新アルファベット全連邦中央委員会の「ソ連邦諸民族の言語と文字」と題された会議で幹部会からの提案としてなされたものも、語彙の創製に関してはそれぞれの民族の文化程度を考慮すべきとしながらも、もし国際的な語彙を導入するのであれば、名詞はそのままの形で入れるべきだとしている

バスカコフは「ソヴィエト連邦内の大部分の言語と術語の発展」を次の三つに分類している。

1) 1917年から1929年：革命前までの術語を批判し、古い（例えばアラビア語やペルシャ語の）術語を人工的な、純化主義的な（甚だしく「民族的な」）語彙に置き換えた時期。このような動きは、しばしば、もともとの術語の意味を歪めることもあったという。また、この頃はロシア語から入った単語はその言語の発音で書かれていた

2) 1929年から1945年：急激な社会主義経済と文化の発展に結びついたロシア語の語彙や国際語語彙のより強い自然発生的な普及の時期

3) 1945年以降：民族語の術語創製の時期。この時期にはロシア語と国際的な語彙をもとにしたソヴィエト連邦内諸民族の文章語の全般的な語彙の全体像がはっきりしてくる

このラテン文字化、キリル文字化そして「国際」的な語彙の扱いの推移など本論ではさらに詳しく検証したいと考えている。

第二章、モンゴル諸族の文字使用の歴史

モンゴル諸民族は現在に至るまで多くの文字を使い、自分たちの足跡を残してきた。

中には契丹文字などのように、未解読の部分を多く残した文字も存在するが、ここでは、モンゴル文字による記録が現れるようになる時代以降にモンゴル諸族によって使われた文字に関して簡単に紹介したい。というのも、モンゴル文字を除いて、20世紀に至るまでには、多くの文字が作られては消えてゆくことになるのだが、それらの文字がそれぞれに何らかの意図を持って

作られているからである。

モンゴル諸族が使ってきた文字として、ここで、紹介するのは、モンゴル文字、パスパ文字、トド文字、ソヨンボ文字、ワギンダラ文字、ラテン文字、キリル文字などである。

初めは、13世紀からラテン文字、キリル文字に置き換わるまで使用された「ウイグル式モンゴル文字」。続いてチベットの仏教僧パスパを招き、元の支配下にある全ての言語を表す文字にしようと試みられた「パスパ文字」3番目に勢力が強くなり、ダライラマを擁立するほどの力を持つようになったオイラト系モンゴル人たちの言語に適応するように作られたと言われる「トド文字」。現在のモンゴル国の国旗にも独立をあらわすシンボルとして使われている「ソヨンボ文字」。そして、詳細を以下の第三章、第四章、第五章にて検討してゆくことになる「ワギンダラ文字」、「ラテン文字」、「キリル文字」、最後にその他、正式に多くの人によって使われたわけではないが、チベット文字のように僧侶の覚え書きなど、個人的に使われた文字に関して検討したい。

以上の二章で、ソヴィエト全体のこの時代の流れ、モンゴル諸族の文字使用の歴史という二つの背景を検討し、次に諸地域での実際の言語政策について検討する。

第三章、ブリヤートの言語政策

民族復興運動の一環として、言語が一番早く議論の俎上に載せられるのはブリヤートである。

1910年、サンクトペテルブルグにて『ブリヤート口承文芸選』という本が出版される。それは1902年ごろから積極的にブリヤート人知識人たちが自民族の発展について語り合った結果として、言語改革の一案としてバザル・バラディンによって民族学研究の装いをまといながらラテン文字化を提案したものであった。しかし、この本は、その数年後始まった第一次世界大戦などの影響などもあり、それほど大きな反響を及ぼすことはなかった。

1926年、バラディンは再度、第一回民族文化会議にてラテン文字化を提案するが、やはり多くの人々の支持を受けられなかった。

1929年、ソヴィエトの各地でラテン文字化への機運が高まってゆき、ブリヤートにもラテン文字化の波が押し寄せ、バラディンと中央の新アルファベット委員会にブリヤートのアルファベット案を作るよう指名されたポッペの両者によるラテン文字化の計画案が発表される。

両者の意見はかみ合わず、文字体系、正書法、表記される方言いずれにおいてもお互いを批

判しあうが、次第に中央から派遣されたポッペ案が優勢となる。

ポッペ案とバラードイン案のアルファベットにおける特徴は、ポッペ案が、一字が一音を表すように作られ、26文字の基礎となるアルファベットに特別な記号が付け足されたのに対し、バラードイン案は、chやzhなど、二字で一音素を表すことで、26文字のなかで全てを表せるようにしたことである。バラードインのこのような思想は、第一章で述べたような全ての民族言語の音素を表す文字を統一しようとする意図から離れていたもので、一度は1930年のウランウデ（当時ヴェルフネウディンスク）で行われた正書法会議で採用されたものの、同年アルマアタで行われた会議では批判され、最終的に1931年のモスクワでの会議でポッペ案の採用が決まる。

この後、正書法案、表記される方言の設定でも、バラードインを含め、モンゴルを視野に入れた改革を進めようとする人たちは排除されてゆき、1936年には現在使われているホリ方言が言語学会議で採用される。

また、すでにこのころからキリル文字化が考えられるようになり、1938年5月に言語学会議が開かれるが、ここで提出されたサンジェーエフ、ダシエフ、アモゴロノフの案の中から、サンジェーエフ案の採用が決まり、1939年5月に「人民の要求を考慮し」採用が決まる。

サンジェーエフは、ラテン文字化案を作成したポッペと知り合った当初は良好な関係を築いていたが、この時期はお互いを非難しあうような中であつた。このため、サンジェーエフのキリル文字化案は、ポッペの影響があつたかもしれないが、直接継承するものとは考えらず、こうしてポッペ案、バラードイン案ともに消えてゆくことになる。

こうして、幾多の変遷を経て現在のブリヤート語となった。

この20世紀初めから、最終的にキリル文字化が決まるまでの過程を、本章で詳細に検討する。

第四章、カルムイクの言語政策

19世紀の終わりから、何度となくカルムイクの滅亡が話題に上るようになるが、そんな中、1915年に民族としての生き残りには教育が不可欠であると考え、トド文字を口語に近づけたいわゆる改革トド文字によって文法書と教科書が1915年出版された。同様の改革トド文字で1917年の終わりに『オイラト報』も出版される。

一方で、ロシアへの同化がかなり進んだ地域であつたドゥルベト出身のカルヴィンなどは、すでに革命当初からキリル文字化を唱えていた。

このような中で、正式に改革トド文字によるカルムイク語表記をやめ、キリル文字表記へと

移そうと決められたのは、1924年1月6日に行われた文字に関する会議においてであった。さらに同年1月12日には「カルムイク文字改革委員会会議」においてカルムイク語の表記のために足りない6つの音素の文字表記が決まる。

1923年6月23日の母語教科書出版委員会会議決定などをみると、教科書の表記として修正トド文字を使って行くことが決められており、この方針の転換はかなり急だったようである。

1925年5月14日の執行委員会幹部会決定を見ると、まだ修正トド文字が使われていた事実が示されており、使用を制限すべきであるという決定がなされている。

また、1925年11月モスクワにいるエレンツェンノフから届いたカルムイク自治州の中央執行委員会に手紙には、当時のアルファベットが書くのに不便であることを訴える内容が書かれていた。この手紙をきっかけに、1926年9月7日に再度、文字に関する会議が行われる。ここでは1924年に決まったカルムイク語用のロシア語にない音素を表す文字の変更がなされる。しかし、この変更を認めない人々の対立が起き、1927年1月にさらに会議が開かれて、変更が確認される。こうして、6月11日になってようやくカルムイク自治州中央執行委員会の決定が出る。

しかし、これでことは納まらず、最終的な決着を付けるためにさらなる会議をすることが同年11月に決定される。そして翌1928年2月5日から8日まで中央から当時のモンゴル学の権威であったウラジーミルツォフが招かれて行われた会議で、三度目のキリル文字によるアルファベット案が採用されるのである。しかし、この会議に参加したチュリャクロフは既にカルムイク語もラテン文字化すべきであるという意見を述べていた。

そして、この時期、多くの言語がラテン文字化したように、カルムイクにおいてもラテン文字への移行が1930年1月7日に決定される。このラテン文字化は、それ以前のキリル文字化を推進した人々を中心とした運動ではなく、新しくカルムイク学科の作られたサラトフ大学の教授と、学生たちを中心とした運動でとなった。なお、中央に指名されたカルムイクのラテン文字化担当者はノミンハーノフというカルムイク人であり、ブリヤートを担当したポッペはカルムイクのラテン文字化にあまり関心がなかったようである。

1931年1月にはモスクワにおいてモンゴル諸族文字・言語問題会議が開かれ、アルファベット案、正書法などに修正を求められた。しかし、これを受けた同年5月17-20日エリスタで行われた第三回州言語・文字問題学術会議では求められたうちの若干の事柄だけの修正がなされただけであった。

1934年5月10-14日に行われた第四回カルムイク言語建設会議では正書法と術語に関する問題が議論され、アルファベットの変更はなかった。しかしこの会議において、モスクワから参加

したノミンハーノフは排除され、翌年には言語政策から身を引くことになる。

しかし、ラテン文字も長くは続かず、1937年12月30日に行われた共産党カルムイク州委員会ビュローで再度のキリル文字化が決定され、1938年3月にはアルファベット案が決まる。しかし、1941年1月15日に再度、表記の変更が行われる。この変更は1941年2月19日 ロシア社会主義連邦共和国人民教育委員会令（第211号）で承認された。1938年と1941年の二案は1959年まで並存することとなる。というのも、1942年には、カルムイク自治共和国がドイツ軍の占領を受け、1943年解放されるもののその年の12月28に自治共和国が解消され、1958年まで一人残らず、シベリアへと強制移住されてしまうからである。

本章ではカルムイクにおいては20世紀初めから、この強制移住直前までの言語政策の過程を詳細に検討する。

第五章、モンゴル語の言語政策

第三章では、モンゴルとの統合を願うブリヤートのインテリゲンツィアたちが敗れ、ブリヤート語が一つの言語として成立した経緯を見てきた。ラテン文字化の途中まではモンゴル語と共同歩調をとることを意識してきたが、結局1936年にブリヤート語の文章語の基盤となる方言の変更によりブリヤート語とモンゴル語の距離は大きくなっていった。ここでは、ブリヤートのインテリゲンツィアが統合の目標としたモンゴルがどのような言語政策を行ったかに関して検討していくことにしたい。なお、ここでいう「モンゴル」とは、1921年以降独立するモンゴル、1924年よりモンゴル人民共和国となり、1990年代にモンゴル国となった領域を指している。

すでに第二章で見てきたように、モンゴルにおいては様々な文字によってモンゴル語が書かれてきた。第二章で検討したので文字使用の歴史は省き、ここではまず背景として清朝が支配した時代から、自治時代（1911-1921）をへてモンゴル革命にいたるまでの言語状況を概観し、ラテン文字化期、キリル文字化期を検討する。

清朝が支配した時代、モンゴルでの行政用語はモンゴル語と満州語であった。このため、モンゴル語、満州語の官吏養成学校が1776年ごろから建てられ始める。20世紀近くになると中国語、ロシア語の学習の必要性も生じ、新たに、それらの言語を教える学校も建てられ始める。

辛亥革命が起こり、本章で検討されるモンゴル地域も武装蜂起し、独立を目指す、最終的に自治が与えられた状態になった。この時期には、近代学校制度の導入が試みられ、上記の言語のほかに、英語、フランス語などを学校で教える計画も立てられた。これらの近代学校制度を含

め、自治政府における近代化の役割を担ったものの多くはブリヤート人たちであった。

1921年モンゴル革命が起き、独立を達成。1924年に活仏が入滅すると、共和国が宣言される。

1925年には、モンゴル人民革命党第四回大会でモンゴル文字の修正を示唆する決議が存在するが、実際の行動は何もなかった。

ラテン文字化は1930年、モンゴル人民革命党第8回及びモンゴル人民共和国第六回大会議が人民の啓蒙に関して出した決定で今後、ラテン文字がモンゴル語を書き表す文字として採用されることが盛り込まれたことにより始まる。

同年の11月には教育省付属のラテン・モンゴル文字協議会が設立され1933年1月までにラテン文字を国字とするという目標がおかれることになった。そして1931年1月にモスクワで行われたブリヤートやカルムイクなどモンゴル系諸族が一同に会した会議でラテン文字化が決定されたのである。

しかし、1932年11月11日、国家小委員会の代表者と閣僚の合同協議会において、労働者たちの識字活動はモンゴル文字で実行するが、ラテン文字に徐々に移行するための準備を行うと決められた。他の分野ではラテン文字化運動はとまってしまうが、教育に関してのみラテン文字化は努力目標として細々と続き、この頃の文盲一掃運動で、赤いゲル、赤い部屋といった文化活動拠点においてラテン文字教育は書類の上では続けられたことになっている。しかし、識字教育も結局のところあくまでモンゴル文字が中心となっていた。

逆にモンゴル文字の教育に関する整備が進み、1936年には、それまでばらばらであったモンゴル文字の順番が整理され、整理された順番で辞書が出されている。

チメグバートルは、新聞などに載った、モンゴル文字支持派、ラテン文字支持派の意見を並べ、分析を試みているが、ここでも1932年から1933年を境にモンゴル文字支持派の意見が多く載るようになっていくとからも、風向きがこの時期に変わったことがわかる。

こうして、1930年より盛り上がりを見せたラテン文字化は一時期、活動停止の状態になる。

この時期までのモンゴルにおけるラテン文字化運動を担ったのは主にブリヤート人たちだったといわれている。そのため、ブリヤートの方言に適応させて作った正書法であるのでモンゴル語に使うのは適当ではないという見解もすでに出されていた。このような見解から、1932年にモンゴル文字による識字活動を行う決定を出すよう圧力をかけたのは当時の科学委員会(後の科学アカデミー)委員長で、外務、内務、経済の大臣をすでに経験していたアマルであった。

1937年から始まる大粛清により、ブリヤート人たちは民族主義者といった罪状などで次々と消えてゆく。当時、モンゴルの指導者であったチョイバルサンはとくにブリヤート人を危険視し

ていたことがわかっている。ロシア革命時に混乱を避け国境を越えて逃げてきたブリヤート人たちは特に白軍との関係を疑われたのである。

その後、ラテン文字化が再開されるのは大粛清の終わった1940年からである。実際は1937年にラテン文字化継続の意思を表す決定は出されるが、活動は行われなかった。1941年2月21年に至ってもモンゴル人民革命党はラテン文字化の意思を表明し続けたが、その一ヶ月ほど後の3月25日には、その決定を無効にし、キリル文字化を決定する。同年11月にダムディンスレン作成による正書法案が完成した。

キリル文字化案を作成したダムディンスレンはポッペの弟子であった。また、方針の転換が急であったためか、それとも、モンゴル文字を廃止することだけが目的だったからか、1940年当時と1941年の文字改革を推進する委員会の顔ぶれはほとんど変わらなかったこと、教科書などの物質的な面では、非常に困難があったようだが、言語の実体計画面に関してキリル文字化が決定し、正書法が承認されていないはずの5月から教員養成が始まっていることから、もしラテン文字化案に関してもし具体的な案があったとするなら、それほどダムディンスレン案と変わっていなかったのではないかと推測される。

ラテン文字化の途中までは共同歩調をとることができたブリヤート語とモンゴル語であったが、ブリヤート語の標準語を作る際の基盤となる方言の変更によりブリヤート語とモンゴル語の距離は大きくなっていった。

このようにして、モンゴルも独自のキリル文字アルファベットを表記していくようになるのである。

本章では上記の過程を詳細に検討する。

第六章、ウラジーミルツォフの夢と現実

本章ではモンゴル研究にいまだに大きな意味を持つ多くの業績を残した研究者ウラジーミルツォフがロシア革命、モンゴル革命によりモンゴル諸族が文語と口語の乖離、つまりダイグロシア状態がどう崩れ、将来どうなっていくと考えたのかを彼の文献やスピーチ、主に1929年に彼が書いた『モンゴル文語・ハルハ方言（ナレーチエ）比較文法』（以下『比較文法』）や、1928年にカルムイクで行ったスピーチなどをもとに探る。そして、そうならなかった現実を検討し、まとめで後に行う第三章から第五章までで検討された三地域の考察への問題提起とするものである。

ウラジーミルツォフは、積極的に文字改革に参加したポッペと違い、第四章で少し触れたよ

うにカルムイクの言語政策担当者たちに招かれて一度だけ発表を行い、序章で見たとおり1931年にやはり招かれて言語学会議に参加したことだけが知られている。彼は、ロシア語、モンゴル語の他、英語、フランス語、ドイツ語、テュルク語、チベット語、サンスクリット語、ペルシャ語に通じ、アラビア語、中国語にも手をつけていたといわれる。残された論文の題名だけ読んでいくと、モンゴル語に他から入った様々な要素を取り除きながら、モンゴルとは何なのかということを探っていこうとする姿勢が見える。彼のような時代をさかのぼって、モンゴルを探求していこうとする人にとって、自分が生きている時代の言語政策はあまり関心がないかのように見える。しかし、彼の残した論文の内容を詳しく検討し、さらに、多くの人が書いた彼の人物評やシャグダロフやウルムジエフなどが専門的に彼を研究した論文を読んでも彼の別の像が浮かび上がってくる。

また、彼がそれまでに残した論文や実績から考えるなら、文学研究、歴史学、言語学、民俗学などの多岐にわたって、彼は無視できる存在ではなく、その発言に影響力がなかったとはいえない。それに、民族の文化の発展を望む中央にしても、そしてモンゴル系の民族のいた諸地域にしても彼を必要としていたのである。

彼は1884年、カルーガに生まれ、1931年8月17日、47歳でラテン文字化が始まった初期に突然亡くなるのだが、それまでに、カルムイク、ブリヤート、モンゴル人民共和国から、北京、パリ、ロンドンにいたるまで、多くのところで調査・研究を行い、モンゴル諸語に関する数々の論文・著作を残している。

言語関係において、一番重要な著作は『モンゴル文語・ハルハ方言比較文法』であるが、この他、モンゴル語におけるアラビア語やトルコ語などの要素を分析する論文も書いており、亡くなる直前に書かれた論文『モンゴル諸文章語』『13世紀の国際文字 パスパ文字』は二つとも言語に関するものであった。

1926年ヘンティ地域を調査したウラジーミルツォフは、民衆に語りかける革命家の言葉の中に多くの文語的な要素が混じっている事実を観察した。ここから、文語だけでつながっていた各地域のモンゴル人たちが口語と文語が段々と融合することによっても統一できると信じたのである。

このようなことから、モンゴル語の有力な方言であるハルハ方言と、それまでのモンゴル文語を比較し留めようとしたのが、1929年、彼の出版した『モンゴル文語・ハルハ方言（ナレーチエ）比較文法』であった。前書きには、この本は音声的な研究にとどまっておりさらに新しく形態論などの比較し考察したものを出版する意向であることが書き残されている。しかし、そのよ

うな本が出版されることはなかった。出版後、この本に対する批判は激しく、続刊を作ることは断念しなくてはならなかったからである。

ウラジーミルツォフが批判された内容はどのようなものだったのだろうか。この本を含めて彼の残した作品から伺えるのは次のようなことである。

一つは、「革命の文字」であるラテン文字化に反対し、封建領主の使う言語の文字を擁護しようとしたことである。とくに1931年に発表された『モンゴル諸文章語』『13世紀の国際文字 パスパ文字』の二作においてその傾向がうかがえる。前者では副題として「モンゴルとカルムイクの文字のラテン文字化に向けて」と書いてあったにもかかわらず、今行われているラテン文字化を賞賛するようなことはまったくかかれず、大部分がそれまでモンゴル諸族が使用してきた文字の概説を長々と書いた。副題と内容からすれば論文は「このような文化遺産を持つのになぜそれを捨てるのか」という非難を暗示したもののよう考えられる。後者においてはパスパ文字の失敗の原因は口語の音声に近づける表記だったからだ結論付け、ラテン文字化運動に関しても同様に口語に近づける運動であったことから両者の類似性を暗示したのである。

二つ目は、ブリヤートやカルムイクの言葉を言語ではなく大方言としたことであつた。彼は、1929年の『比較文法』の中で、モンゴル諸族の言語に関して、彼はモンゴルという一つの言語を立て、その下位区分として、ハルハ大方言（Наречие）、オイラト大方言、ブリヤート大方言を立てたのである。カルムイクはオイラト大方言のさらに下位区分に位置していた。当時の民族にたいする言語政策からすれば、文章語は普通の人民の言葉に基づいたものであり、古くからあり因習のこびりついた旧来の文章語は捨て去るべきものであつた。しかし、その因習のこびりついた言葉のみを言語とし、人民の言葉を大方言と表現したのである。

さかのぼって考えるならば、1928年、ウラジーミルツォフがカルムイクで開かれた言語学会議に参加したが、彼の行ったスピーチはカルムイク人たちに不評だったという理由も理解できるのである。キリル文字化の真っ直中にあつたカルムイクにおいてウラジーミルツォフは、ウイグル式モンゴル文字の意義を、アラビア文字とアラビア語の流通地域を引き合いに出しながら、モンゴル、ブリヤート、モンゴル三地域だけでなく、モンゴル語の通じる地域では、言葉は違っても同じ文字が読み書きされている事実を示し、ウイグル式モンゴル文字を保持すべきだと暗に主張した。しかし、それは、その当時、カルムイク人たちが思っていた人民の言語で文章語を作るという原則に反した考え方だったのである。

三つ目は、捨て去るべき封建領主や坊主たちが使う、普通の人民には理解できない文語を人民の言語に融合させて使おうとする彼の考え方にあつたのである。革命家たちのスピーチからそ

の傾向を読み取ったことはすでに述べたとおりである。ウラジーミルツォフの見解に従うならばロシア語はまさに教会スラブ語とロシア人たちの使ってきたことばの融合という歴史を経てきたのに、モンゴル諸族では、独立国の言語であったモンゴル語以外では許されなかったのである。

まとめ 「言語」の統合と分離

最後に「まとめ」として問題設定に応える形で以上の事柄をまとめる。

それまで、モンゴル文語という一つの文章語で意志の疎通ができていた頃の曖昧模糊とした「言語」という概念が、最終的にはモンゴル語、ブリヤート語、カルムイク語という独立した3つの「言語」に回収していく過程を見たわけだが、そこには次のような動きが存在したように思える。

- 1) モンゴル全体を統合する動きと、各地域へと分離していく動き
- 2) ブリヤート、カルムイク、モンゴル人民共和国諸地域におけるそれぞれの内部での統合と分離の動き

統合する動きは、近代的な意味での民族としての定義がまだ曖昧であったモンゴルという全体を、一つの文章語を堅持することによって、まとまりを維持していこうという動きであった。近代化の議論が早くから行われたブリヤートでは、近代化と言語の問題が議論され始め、ワギンダラ文字のようなモンゴル文字を修正したものや、ラテン文字で母語を書こうとする試みがあった。しかし、それらの文字はあくまで基礎の段階を修得する目的のものであり、次の段階でモンゴル文字を修得し、モンゴル文字で読み書きするためのものであった。他のモンゴル世界との関係を断ち切らずに保持しつつ、人々を啓蒙するための文字だったのである。ブリヤートだけでなく、大きなモンゴル世界を構想したブリヤート人は、ブリヤートでの活動と同時に、第五章で見たとおりモンゴルに招かれ、自治政府や、人民共和国の近代化計画にも積極的に参加し、リードを取っていった。ラテン文字化が始まり、ブリヤートはモンゴルとともにハルハ方言をその文章語の基礎とすることを決めた。そして、さらにそのような統合の動きにカルムイクをも取り込もうとしたのが、1931年1月モスクワで行われたモンゴル諸族言語・文字問題会議であったのである。

カルムイクは1924年からキリル文字を採用しており、独自の道を歩んでいた。ラテン文字化

期、社会主義の時代に育った世代が、運動の主導的立場に立った。彼らは、1931年に行われたモスクワでの会議に反発し、それまでの原則をほとんど変えなかった。現在に至っても原則は変わらないままである。

すでにここで統合の動きの一部は挫折するが、ブリヤートやモンゴルにおいても、方針の変更がなされてゆく。

1931年6月、ハルハ方言の採用は第三回共産党ブリヤート・モンゴル地方委員会幹部会で、「王侯貴族の絶滅した言葉をブリヤートに広めようとする汎モンゴル主義」と批判された。幹部会は文章語を形成する際には「ブリヤート・モンゴル労働者の生きた話し言葉から」離れてはならないとし「何よりも、ハルハ人民のことばに一番近いセレンゲ方言」に基づいたものにすべきであると決定したのである。

モンゴルにおいては、1932年11月、国家小委員会の代表者と閣僚の合同協議会が、労働者たちの識字活動はモンゴル文字で実行するが、ラテン文字に徐々に移行するための準備を行い、文字を教える基礎となる教科書を早急に出版することを決定するが、実質この決定はラテン文字の実施を棚上げするものであったのである。

モンゴルでの活動が下火になる中、ブリヤートにおいては、なおもラテン文字化がつづけられていく。しかし、モンゴル語に近いという理由で採用されたセレンゲ方言は、ブリヤートの人口の10%にしか話されておらず、さらに、首都近郊の中心的な方言であるホリ方言との差があったために次第に批判の声が高まってゆく。その声は1936年に行われた言語学会議によって、セレンゲ方言からホリ方言へと文章語のもととなる方言が変わるきっかけとなった。こうしてブリヤートは自らもモンゴルと距離を置くこととなった。

一方のモンゴルも、それまで影響力のあったブリヤート人たちの大部分が標的となった大粛清期以降、再びラテン文字を見直す動きが始まる。が、ブリヤートとの協調は話題に上ることはなかったようである。

こうして、統合を志向する動きは解体され、分離した諸地域の言語が残った。

この時代に生き、ラテン文字化運動の最初期の1931年に亡くなったウラジーミルツォフは、革命以降モンゴルにおいて、口語に文語の影響を認め、その「革命的变化」を書き残そうとした。かれは、このような口語と文語の融合によって、それまで大きな差異があったモンゴル文語と諸地域の方言の差異が、埋まるだろうと考えていたようである。実際、そのような動きは、モンゴル文字を使っていた時代のブリヤートでも観察されていたのである。

よってかれにとってモンゴル諸族全てで始まるラテン文字化も、その前に始まっていたカルムイクにおける最初のキリル文字化もあまり好ましいものではなかった。というのも、これらの運動は文章語によって統合されていた「彼らの言語自体の大きな変化をも意味する」ものであり、その変化とはそれぞれの言語の分離を意味したからである。

1928年、最初のキリル文字化の議論が紛糾していたカルムイクにのりこんで、アラビア語を例にとって、広い範囲でコミュニケーションできることの重要性を述べたのも、そうした危険性を伝えたかったからかもしれない。明確なことばではなかったが、暗示するような形で彼は死ぬ寸前まで様々な論文で、変化の意味を警告しつづけた。

しかし、現実には彼の望む方向へは向かなかった。

一方、ブリヤート、カルムイク、モンゴル人民共和国の諸地域内部でも統合と分離の動きが存在した。

ブリヤートにおいて、最大の問題となったのは、東西ブリヤートの問題である。

もともと、ブリヤートは一つの集合体として意識されていたというわけではない。1822年のスペランスキーの改革により、ブリヤート人たちの自治が認められ、「草原議会」という自治政府を成立させたが、これは支族をもとにしており、ブリヤート全体が一つの行政機関を持つものではなかった。また、19世紀になって年代記がさかんに書かれることになったが、これも支族毎のものであり、ブリヤート全体をまとめたものはなかったのである。統一の意識を持つのは、民族意識に目覚め、バイカル湖の東西にブリヤートと名付けられた人々がいることを、ブリヤート人の知識人たちが自身で理解し始めてからのことだろうと思われる。しかし、それはモンゴルというもっと大きなコンテクストの一部としての理解であった。

宗教的に見ると東部は仏教の影響を受けたものの、西部では仏教の布教が禁止されたため、それほど影響を受けることはなかった。そのため、仏教とともに広まっていったモンゴル文字も西部全域に広まらなかった。また、仏教語彙から社会の多岐にわたる用語があらかじめ準備されていた東部と、ロシア語の影響の強い西部では、語彙的にも非常に大きな差異が生じた。

革命以降、西部はそれほど、自分たちの言語に重きを置かず、ロシア語を重視し、さらに、自分たちの言語を書き表す文字にも意見に違いが生じていた。

ラテン文字化当初はハルハ方言を書き言葉の標準とし、ブリヤートの方言的要素を蔑視し、直そうとしたのである。

1931年に西ブリヤートで行われた言語学会議では、西ブリヤートの方言で書かれた本などを作成すべきという提案がなされている。しかし実現することはなかった。

その後、書き言葉のための方言がセレンゲ方言に変わっても、それほど、西ブリヤートとの差は埋まらなかった。1936年にホリ方言が採用されると、方言差はかなり解消されたと思われるが、それでも、ホリ方言と西のブリヤート諸方言の間には、語彙的にも文法的にも埋まらない差異が多く存在した。1937年には西部地域がイルクーツク州に併合され、行政区画としては分離することになった。しかし、言語に関しては様々な議論はあっても東西に分離することはなかった。

カルムイク人たちはロシア帝政時代には大きく三つの地域に別れて住んでいた。南部のドゥルベト人たちはスタブロポリ州に、東部のトルゴート人たちはアストラハン州に、そして、西部のブザウ人たちは、ドン河流域にコサックと一緒に住んでいたのである。ソヴィエト政府から自治が認められた後、どのような方向で自治をするかを話し合った1920年6月のカルムイク人たちの会議に参加したアマルサナンは自伝的小説『ムドレシキン・シン』のなかで「カルムイク人自身の何世紀もの歴史において、ウルスや支族同士の偏見を乗り越えて、貧しい普通の人々が集まったのはこれが最初である。これが最初だったのである」とのべている。すでに18世紀の終わりにカルムイク・ハーン国が解消され三つの地域に分けられて、その管理下におかれるようになってから長い年月が過ぎていたのである。

この時期においては、カルムイクと総称でよばれているが、それぞれは別の意識を持ち分裂の危険もあったといわれる。原因の一つは内部紛争であるが、もう一つはロシア人からの干渉であった。カルムイク文学を専門とするカルムイク大学カルムイク語科副学長ビチューエフ氏によれば、先ほど紹介した『ムドレシキン・シン』にはそうしたロシア人達の干渉をさげ、夜、会議場となった場所を出て草原で、カルムイクの代表団が自治を語り合う場面があったという。再版されるたびに、その時の共産党の方針によって内容が変わっていったため、1924年にはじめて出版されたこの本の最新版である1987年版には、そのような事実は書かれていない。小説という形式を取っているため、全てを事実とすることはできないかも知れないが、議事録にも載っていないこの出来事が、もし事実とすれば、この会議においてカルムイク人同士の分裂をさげ、ロシア人達の干渉を排し、カルムイク自治共和国が成立したことになる。

しかし、最初のキリル文字化の時代から、どのようにしてカルムイク語を書いていくかに関しては、カルムイク人同士で意見が合わなかった。1931年にモスクワでは一度トルゴート方言

と決められたが、同年のエリスタでの会議では他の方言要素も重視することになり、1934年に行った言語学会議では、トルゴート方言を基礎とすることばさえ聞かれなくなっていくのである。

方言差の問題で争うことを避けるためとられた措置が講じられなかったわけではなかった。正書法において、第二音節以降の弱化母音を書かないのもその一つだといわれている。また、語彙においては、基礎語彙においてもトルゴート、ドゥルベトの両方言が並存する形で存在しているのもその一つである。

統合というには緩やかであるが、両方のバリエーションがほぼカルムイク語の文章語として認められたのである。

モンゴルについてはどうだろうか。

モンゴルは辛亥革命において内モンゴルと領域的に統合する可能性を有していた。一時期、内モンゴルも支配下に修めるが結局撤退せざるを得ず、その試みは失敗に終わる。1921年のモンゴル革命時期にも様々な危機に直面したが、外モンゴルとよばれた地域はモンゴル人民共和国として独立を果たした。

モンゴルには、ブリヤート、カルムイク以上に様々な方言が存在しているが、ハルハ方言の優位性は当初から揺るぎのないものであったようである。むしろ、モンゴル文字による文章語とハルハ方言を基礎とした新しい文章語を作る人々との対立があったと考えられる。1932年にモンゴル文字による文章語を支持していた当時の科学委員会委員長のアマルが、ブリヤートのことばに適応させて作ったラテン文字の正書法をイシドルジがハルハ方言に無理に使っていると非難しているように、当初において、新しい文章語はブリヤート人が中心となって推進するものであった。しかし、大粛清により保守派もブリヤート人たちもその多くが排除され、新しいラテン文字化が考えられた時には、もう対立は解消されてしまっていたようである。

モンゴルの場合は、方言差による内部の分裂を抑えての統合というよりは、むしろ、過去にあるとみなされたもの（モンゴル文字の文章語）と外にあるとみなされたもの（ブリヤート人）を排除することによって統合を完成させたというべきなのだろうか。

こうして、三地域それぞれに地域内での統合を完成させる。

以上、検討した事実から、お互い似通った言語において、「言語」が成立する過程において言

語自体の本質的相違が必然的に言語を生み出しているのではなく、政治的な方針によって言語の外部にあるもの排除し、内部の多様性を抑えることによって成立したという結論に達する。

また、初期のブリヤートにおけるラテン文字化のように標準語を外部から持ってくることは難しいことであった。特に国境がある場合には、国外にある民族との統合や、今ある国家からの分離への猜疑心をもたれてしまうのである。ルーマニア語とモルドヴァ語がほぼ同じ言語であり、国境と文字だけが二つを分かつものであるということはよく知られている事実であるが、ブリヤート語においても、モンゴル語とほぼ同じ言語になる可能性があったにもかかわらず、別の言語になったのはこの二つの集団の間に国境があったことが大きかったのである。

逆に、隣接していない遠く離れた場所との統合はさらに難しいようである。他のモンゴル人の住む場所からかなり隔たった場所にあったがカルムイクはモンゴルと交流が全くないわけではなかった。モンゴル革命に本研究にも出てきたカヌコフやノミンハーノフが参加していることは、彼らが自分たちのモンゴル性を意識していることのあらわれといえよう。反対に、モンゴルの人々も集団化の時代に飢餓状態になったカルムイクの人々に対して、食料援助を行っている。また、カルムイクの人々は新疆に住む同胞へも同じように関心を寄せていた。1926年に創刊された新聞『オラーン・ハリマク』（革命初期のものとは別物）は、毎号のように中国の状況をトップ記事として掲載しており、また1924年の公文書資料には、新疆から来たカルムイクに来た同胞がレニングラードの現代東洋語大学で学べるように請願する文章が残っているのである。しかし、言語に関しては、文明を取り入れるためにキリル文字化をしなければいけないと考えていた。こうして踏み出された最初のキリル文字化の時期に様々な議論が戦わされ、ようやく落ち着くかというところにラテン文字化運動が始まる。ラテン文字化期の1931年にモスクワで開かれた会議でのモンゴル諸語の統合を意図するような会議の決定は、以前あった議論を再度、同じことを蒸し返すように見えただろうし、また、場合によっては言語政策の主導権を他に渡しかねないものと受け取られ、カルムイク人たちは、決定に反対するような行動をとった。

以上であげられたような事実は、言語が「造成」されるきっかけとして、ほぼ全て知られたものであり、新しい事実の発見とはいえない。ただ、そのような事実が、モンゴル諸族における「言語」の成立の過程を通じても見いだされているということをここで述べておきたいと思う。

1920年代から1940年代までのモンゴル、ブリヤート、カルムイクの3地域においては、「言語」や「民族」の形成に関して様々な可能性が存在した時期であった。

現在においてはそれぞれがブリヤート語、カルムイク語、モンゴル語という「言語」をもつ「民族」となった。しかし、こう言ったからといって、現在選ばれた選択肢が幻想であるとか、間違っているとか主張するわけではない。実際、その定義のもとで人間が生活しているかぎり、それは実体として機能するのである。ただし、それは唯一の真実としてそこにあるものではなく、政治的な運動で変わる可能性もあるのである。ここに提示されたのは、一つのものとしてそれぞれの民族が定義される前の自己規定を、言語に関する議論を通して検討したものなのである。

また、以上で、検討した資料は全て知識人たちの言説や政治的な決定からのものであり、民衆が自分をその当時どう規定していたかを表していないことには注意していただきたい。おそらく、このような知識人たちの議論の結果を契機に、学校での教育や、文章語の存在や、文化的な品々の陳列などによって自分の目に見える形で「民族」が提示されることから、曖昧模糊としていた自己規定の一ヴァリエーションであったはずブリヤート、カルムイク、あるいはモンゴルが「民族」の概念とイコールで結ばれ、大衆化したと考えられる。

いずれにしても、ここで検討されたモンゴル諸語の事例から引き出せる結論は、近代になって成立する「民族」あるいは「言語」は必然の結果として成立したのではなく、可能性の中から意志と意志のせめぎ合いの中で残った一つの結果から成立したのだということである。言語に関して言えば、すべての人々が古くからあるモンゴル文語に文章語が統一したままであった可能性も存在したし、同様の統一状態はラテン文字化でなされていたかもしれない。また、カルムイク語は独立したとしても、ブリヤートとモンゴルの言語は統一できたかもしれない。本研究では、そのような可能性があったことを示したかったのである。

ことばを変えれば、過去に人々がどう考えていたかを提示し、多様、多重であった人々の自己規定の一要因である言語の定義が、ここで検討されたモンゴル諸族のもとではどのようにまとまったかを考察すること、過去に起こらなかった可能性を記述し残すことが、筆者が本論にて意図したことなのである。